

将軍の産土神を祀る

根津神社

正 確には、今年は農学部^の弥生移転72年目にあた
る。人で言えば、赤ん坊が老年に達するほどの歳
月だが、「70年を少し超えたくらいでは、このあたりで
はまだまだ新参者」と會田学部長は控えめだ。実際のところ農学
部のキャンパスに近い根津神社などは、この地ですでに3世紀以
上の時を重ねている。

その歴史にひかれて會田学部長と根津神社の宮司、内海一
紀氏を訪ねた。白装束に凛とした気概を包み込んだ内海氏に神
社の由来を聞く。

氏によれば、根津神社は、もともと千駄木にあった小さな社
だった。この地に移ったのは宝永3年(1706)のこと。五代目将軍
徳川綱吉が兄綱重の子綱豊(徳川家宣)を六代目に定め、千駄
木の氏神根津神社に綱重の下屋敷の敷地を献納した。家宣は
この下屋敷で生まれているので根津神社は家宣の産土神^{うぶすながみ}でも
ある。昨年は丁度遷座300年にあたり、境内で盛大に大祭が
執り行われた。

明治よりこの神社を守る内海家には、一高の思い出もある。氏
の祖父が宮司を務めていた頃、神社の大太鼓を一高生が度々
借りて来た。「対抗試合があって、その応援に使ったようです」と
内海氏は、ほんの少し顔をほころばせた。



農学部が弥生に移転した頃の根津神社。



農学部の氏神、根津神社を訪ねる。



弥生の氏神が招く

向ヶ岡弥生町

司 馬遼太郎の『街道を行く』のなかにも弥生について
触れた一節がある、と會田学部長から教えられた。
その箇所を読むと、旧水戸藩の廢園に徳川斉昭の
歌碑があり、弥生の町名はその詞書に由来するとある。「弥生式
土器」「弥生時代」の“弥生”の大本もそこにある。

日本人が稲作を始めた「弥生時代」を踏まえ、司馬遼太郎は
「弥生」を「稲作文化の象徴のようなことば」と評し、その語義は
「草木がますます生ふる」だと教える。
「弥生という地名に農学との結びつきを感じませんか?」。會田学
部長はにこやかにそう問いかけた。そう言われると、72年前、農
学部は、稲を育て草木を茂らせる弥生の氏神から、密かにこの
地に招かれていたのかも知れない、という気がしてきた。



弥生の由来について語る。

明治五年。町屋ができて初めて、町名が必要になった。
たまたま旧水戸藩の廢園に、水戸徳川家九代目斉昭(烈公)の歌碑が
建てられており、その歌の詞書に、「ことし文政十余り一とせという
年のやよい十日さきみだるるさくらがもとに」という
文章があったから、弥生をとった。

司馬遼太郎 『街道を行く』 本郷界隈より

